

# 第32軍司令部壕 ガイドテキスト (写真資料編)

※本書は、実際に現場案内をする際に活用することを目的とした「参考資料」として作成しております。

「第32軍司令部壕ガイドテキスト」本編と合わせて必要に応じてご利用ください。

## 第32軍司令部壕ガイドテキスト (写真資料編) 令和7年度版

2026年(令和8年)3月発行

企画・発行：沖縄県知事公室平和・地域外交推進課

098-894-2226

編集・作成：株式会社まるとまると

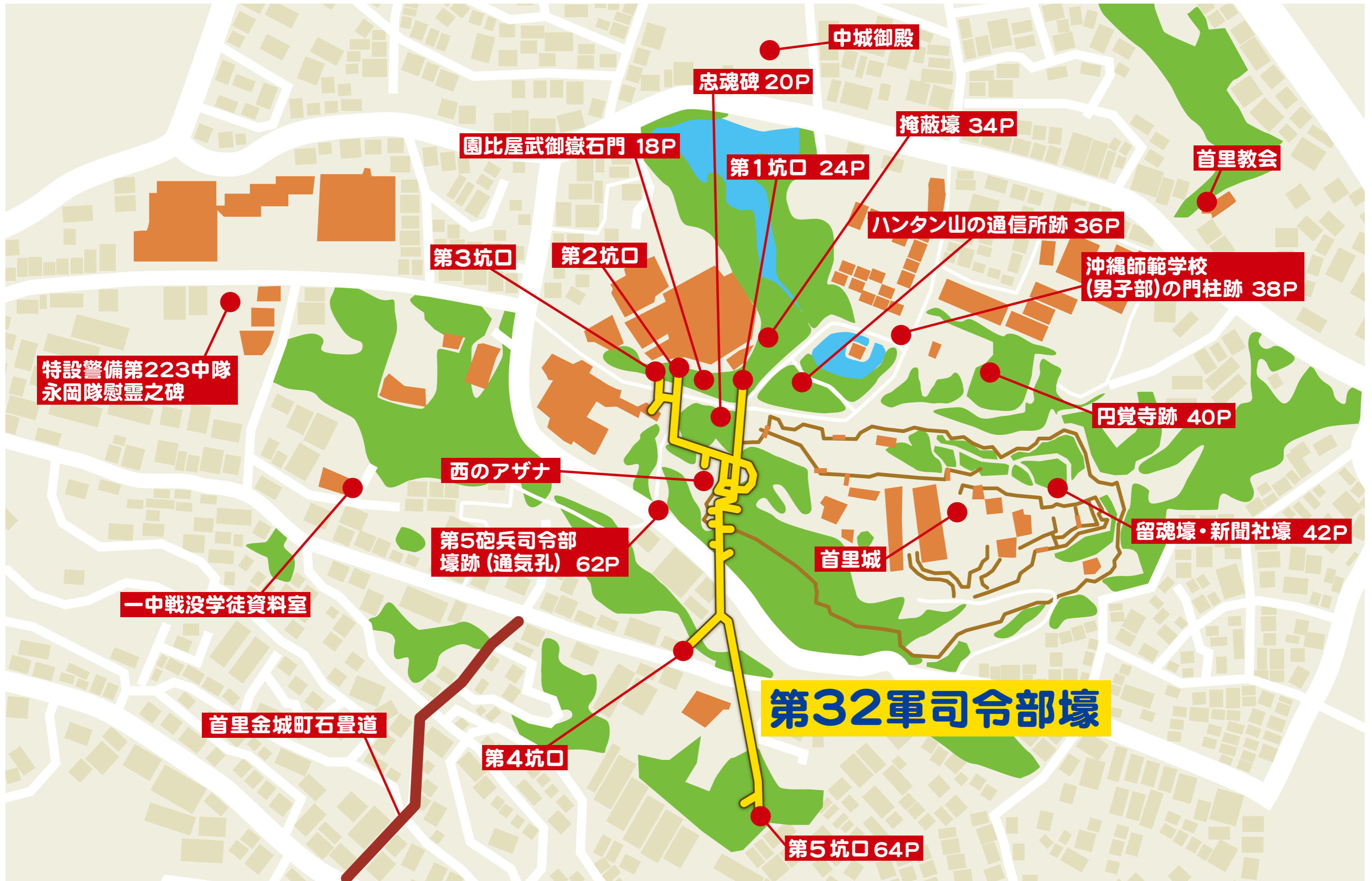
沖縄県 第32軍司令部壕専用ホームページ

<https://32okinawa.com>



- 2 / 第32軍司令部壕と周辺図
- 4 / 日本軍第32軍首脳部の集合写真
- 6 / 沖縄戦の戦闘経過図
- 8 / 沖縄島中南部での第32軍の戦闘経過
- 9 / 第32軍司令部関連年表
- 10 / 沖縄戦の沖縄県出身戦没者数の推移
- 12 / インテリジェンス・モノグラフ
- 14 / インテリジェンス・モノグラフ(日本語訳)
- 16 / 第32軍司令部壕の位置
- 18 / 戦後の園比屋武御嶽石門
- 20 / 戦前の首里の忠魂碑
- 22 / 第1坑口、掩蔽壕、通信所跡周辺の平面図
- 24 / 第1坑口の調査現場
- 26 / 第1坑道内部の写真(米軍撮影)
- 28 / 第2坑道内部の様子
- 30 / 第3坑道内部の様子
- 32 / 「エンジニアトンネル」
- 34 / 掩蔽壕の内部(北東から)
- 36 / 通信所の内部
- 38 / 戦前の沖縄師範学校正門
- 40 / 戦後の円覚寺三門
- 42 / 1945年4月29日付沖縄新報(表面)
- 43 / 留魂壕・新聞社壕の内部構造
- 44 / 1945年4月29日付沖縄新報(裏面)
- 46 / 戦前の沖縄神社拝殿(首里城)
- 48 / 廃墟と化した首里城の瓦礫の山
- 50 / 戦時中の首里の様子
- 52 / 十・十空襲
- 54 / 沖縄島西海岸での米軍の物資陸揚げの様子
- 56 / シュガーローフ・ヒルの風景
- 58 / 立坑Aを上から見た写真(米軍撮影)
- 60 / 立坑A側面図
- 62 / 第5砲兵司令部壕の通気孔(戦後)
- 64 / 第5坑口の外観
- 66 / 第5坑道内部の様子

令和7年度版



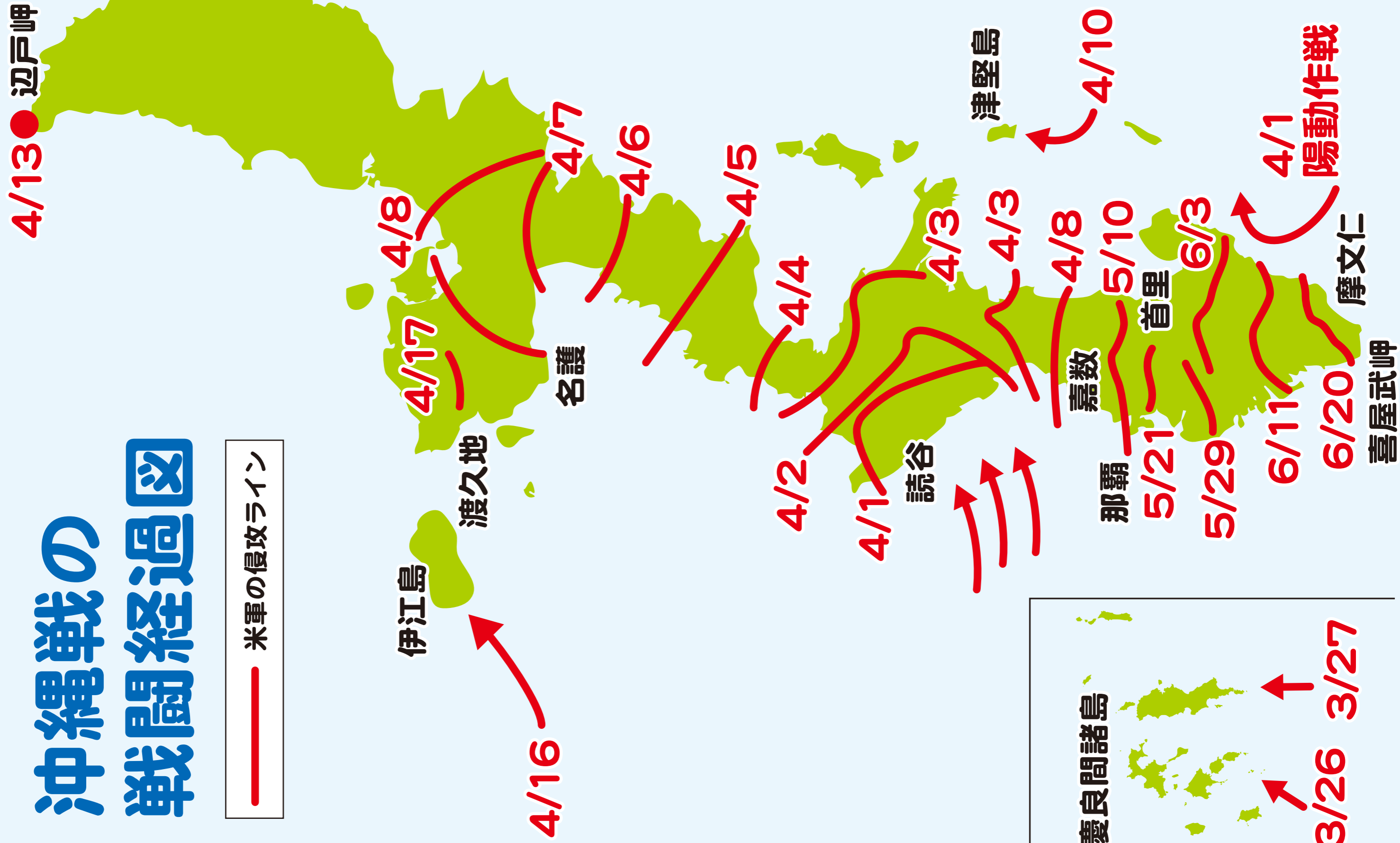
第32軍司令部壕と周辺図



日本軍第32軍首脳部の集合写真[1945年(昭和20年)2月] / 出典: 沖縄県公文書館

# 沖縄戦の 戦闘経過図

— 米軍の侵攻ライン



「沖縄県史ビジュアル版14 沖縄戦」を参考に作成

# 第32軍司令部 関連年表

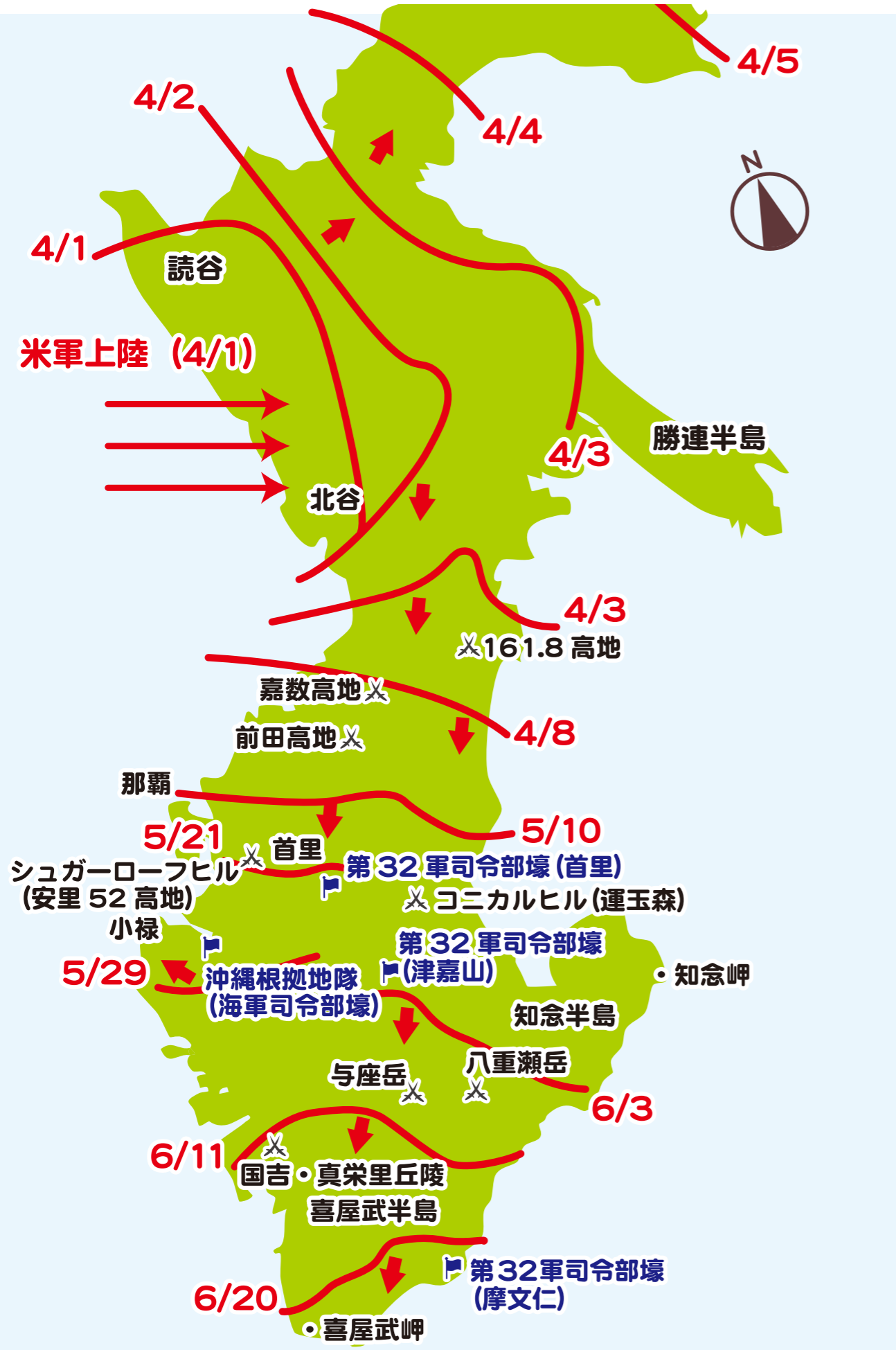
## 1944年 (昭和19年)

- 3月22日 大本営、第32軍を編成
- 3月25日 第32軍司令部、福岡で編成を開始
- 4月 2日 第32軍司令部を真和志村松川の蚕糸試験場に置くことを決定
- 8月10日 牛島満司令官着任
- 9月 南風原村津嘉山で、戦闘司令所の構築を開始。  
読谷山村石嶺久得で、軍予備戦闘司令所の構築を開始
- 10月10日 米軍機による南西諸島空襲(十・十空襲)
- 12月 3日 司令部を首里に置くことを決定 翌年1月中旬までに移転できるように準備を命じる
- 12月 9日 首里城地下で第32軍司令部壕の構築を開始

## 1945年 (昭和20年)

- 1月21日 司令部を首里の沖縄師範学校内に移転
- 2月15日 「第32軍戦闘指針」を発表「一機一艦船、一艇一船、一人十殺一戦車」の特攻作戦の発令
- 3月23日 米軍、南西諸島全域を空襲 第32軍司令部、首里城地下の第32軍司令部壕に入る
- 3月26日 米軍、阿嘉島・座間味島・慶留間島に上陸
- 4月 1日 米軍、沖縄島中部西海岸に上陸
- 5月 4日 日本軍、総攻撃に出るが苦戦。翌日、攻撃を中止
- 5月 5日 第32軍、「天ノ巖戸戦闘司令所取締二関スル規定」を定める
- 5月22日 「新作战計画」を策定し、喜屋武半島に撤退することを決定
- 5月27日 第32軍司令部壕を放棄、津嘉山に移動
- 5月30日 第32軍司令部、津嘉山から摩文仁に撤退
- 5月31日 米軍、首里を占領
- 6月19日 第32軍牛島司令官、「爾今各部隊は各局地における生存者中の上級者之を指揮し  
最後迄敢闘し悠久の大義に生くべし」の命令を下達
- 6月23日 第32軍牛島司令官、長参謀長自決(6月22日の説もある) 第32軍の組織的戦闘の終了
- 9月 7日 米軍第10軍司令部(越来村森根)で降伏調印式

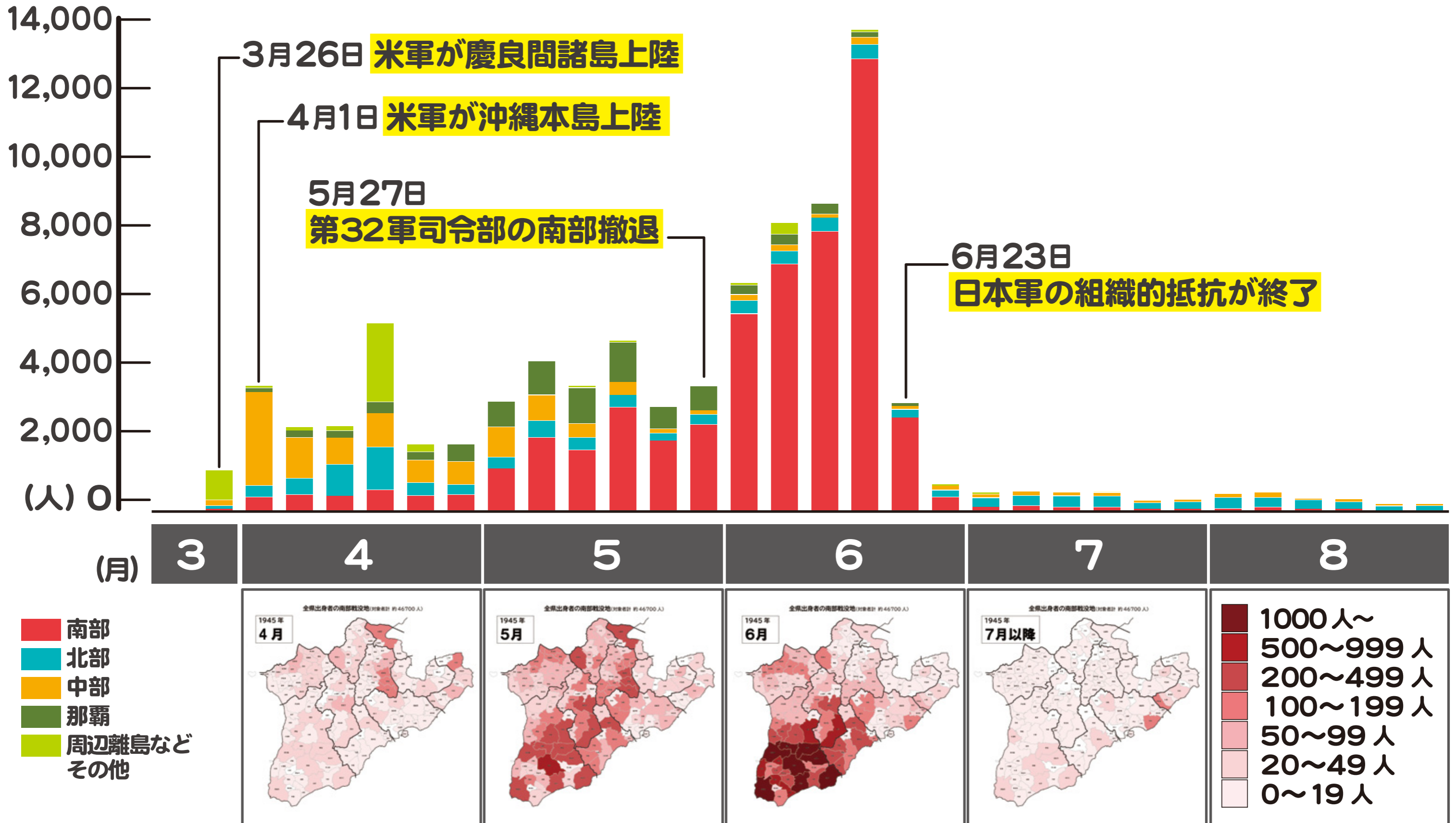
※戦闘としての沖縄戦はほぼ終わったが、投降せずに翌年まで山中に潜伏し続けた部隊もいた。  
島々や本島の民間人収容地区では飢えとマラリアによる被害は続いていた。  
また多くの住民が郷里に帰ることができないままだった。



沖縄島中南部での第32軍の戦闘経路

第32軍司令部 関連年表

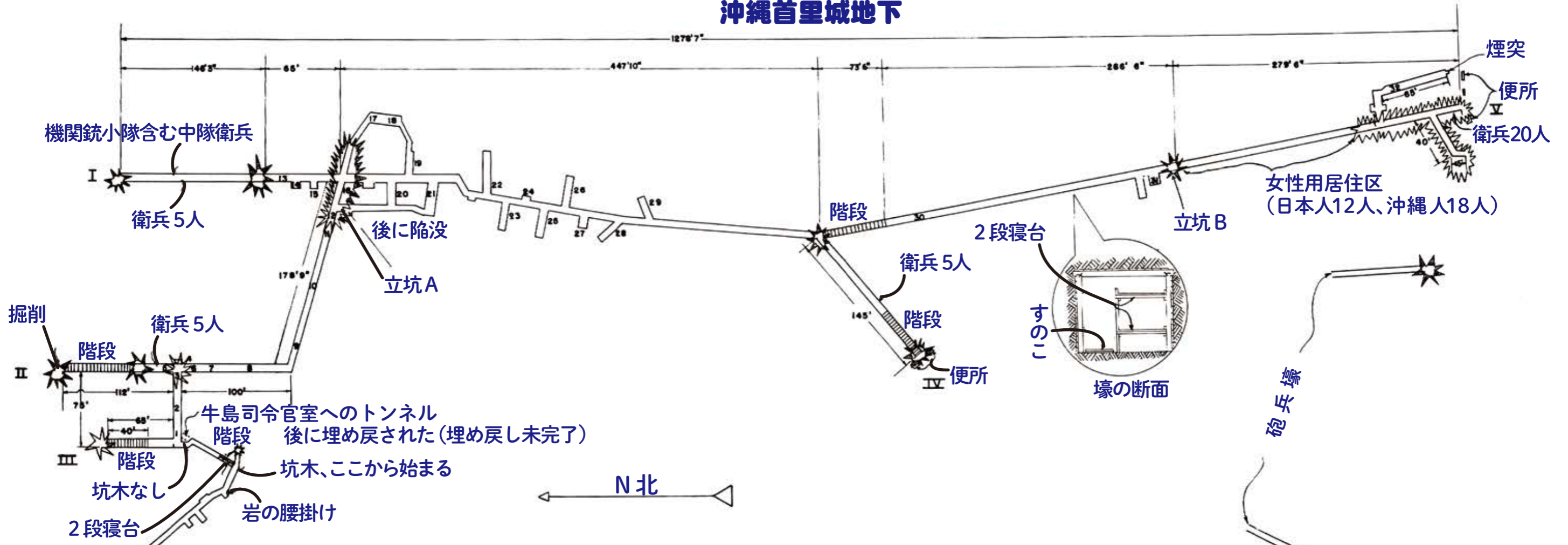
# 1945年3月26日～8月末までの沖縄県出身戦没者数の推移



1945年3月26日～8月末までの沖縄県出身戦没者数の推移 (おおよそ5日区切りで抽出) と南部での戦没地  
 / 出典: 平和の礎の刻銘者データより作成、北上田源「平和の礎の戦没者情報から読み解く沖縄戦の実相(2)」(2026)



図版7  
 平面図  
 日本軍 第32軍司令部  
 沖縄首里城地下



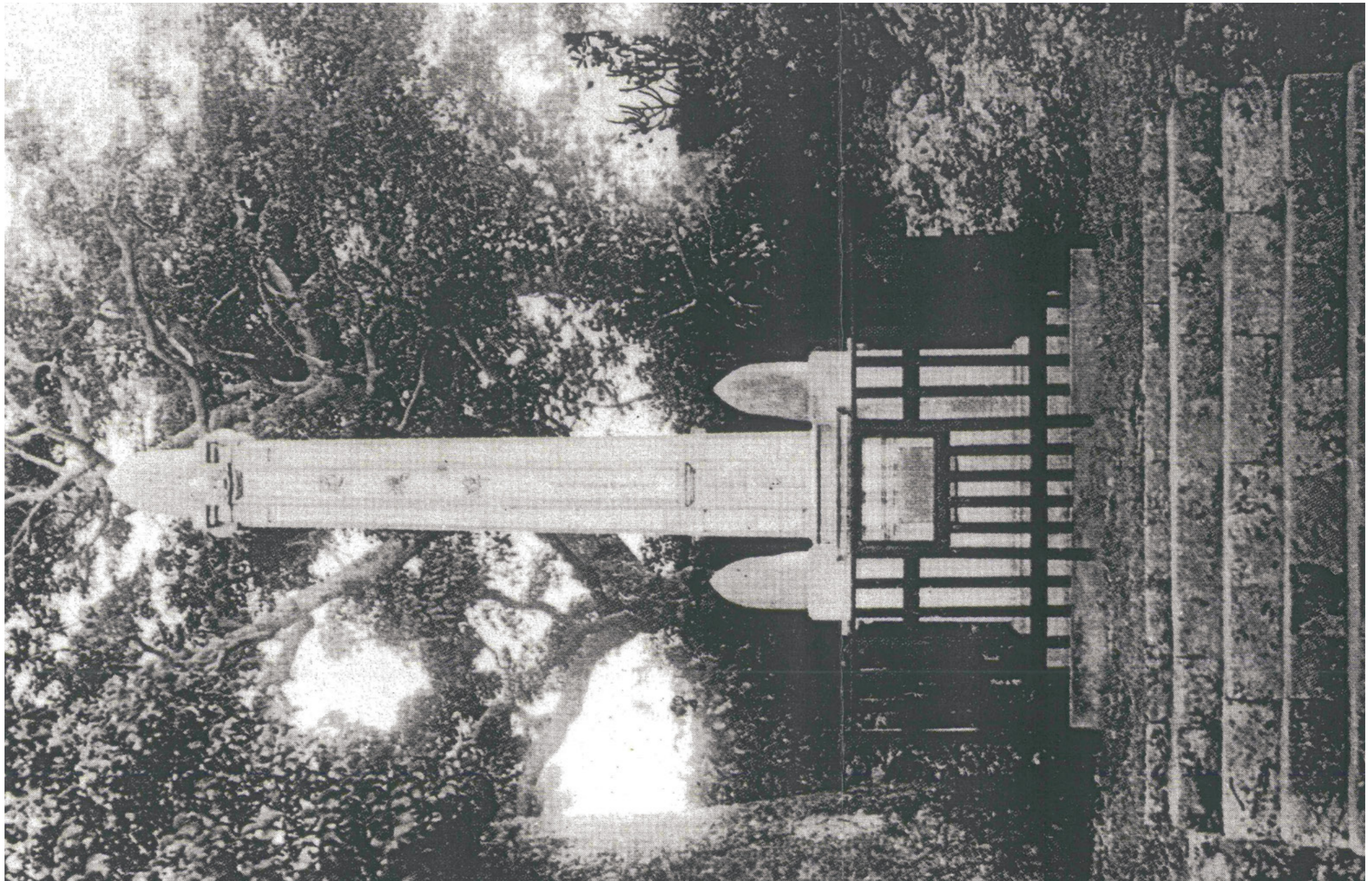
部署名	高さ	幅	長さ	部署名	高さ	幅	長さ
1 軍司令官室	6'2"(188cm)	4'10 1/2"(148.59cm)	約20'(約609.6cm)	22 第32軍電信補給部	6'2"(188cm)	7'(213.36cm)	40'(1219.2cm)
2 参謀長室	"	"	"	23 独立混成第44旅団情報部	"	"	25'(762cm)
3 参謀室	"	"	"	24 救急所	"	5'(152.4cm)	7'(213.36cm)
4 高級副官室	"	"	6'6"(198.12cm)	25 第32軍航空情報部	"	"	25'(762cm)
5 書記官・伝令	"	"	約20'(約609.6cm)	26 軍医部	"	"	30'(914.4cm)
6 作戦室	"	"	約15'(約457.2cm)	27 将校室	"	"	10'(304.80cm)
7 元は独立混成44旅団司令官室 後に女性タイピスト10人の居室	"	"	約20'(約609.6cm)	28 陣地構築部	"	6'(182.88cm)	20'(609.6cm)
8 食料貯蔵庫	"	"	"	29 軍医室	"	"	"
9 電信部	"	"	約35'(約1066.8cm)	30 独立混成第44旅団参謀室	"	6'5"(195.58cm)	約15'(約457.2cm)
10 気象部	"	"	"	31 海軍陸戦隊司令官 (大田少将) 1945年5月10-17日	"	"	10'(304.80cm)
11 物資・兵員部	"	"	"	32 炊事場	"	6'(182.88cm)	65'(1981.2cm)
12 捜索部	"	"	約20'(約609.6cm)				
13 通信部	"	6'6"(198.12cm)	約15'(約457.2cm)	A B 2次入口と換気口			
14 電話交換器	"	7'(213.36cm)	7'(213.36cm)	2次トンネル	6'2"(188cm)	4'10 1/2"(148.59cm)	
15 将校室	"	"	"	I-V 入口			
16 命令下達所	"	4'10 1/2"(148.59cm)	約20'(約609.6cm)	主トンネル	6'2"(188cm)	6'6"(198.12cm)	
17 第32軍情報部	"	10'(304.80cm)	15'(457.2cm)	★ 爆破地点 (通行不可)			
18 第24師団作戦部	"	"	10'(304.80cm)				
19 第24師団作戦部	"	6'(182.88cm)	20'(609.6cm)	★ 爆破地点 (通行可能)			
20 第24師団師団長	6'8 1/4" (203.8cm)	7'10"(238.76cm)	20'2"(614.68cm)				
21 第24師団将校	"	10'(304.80cm)	30'(914.4cm)	※ およその数字			



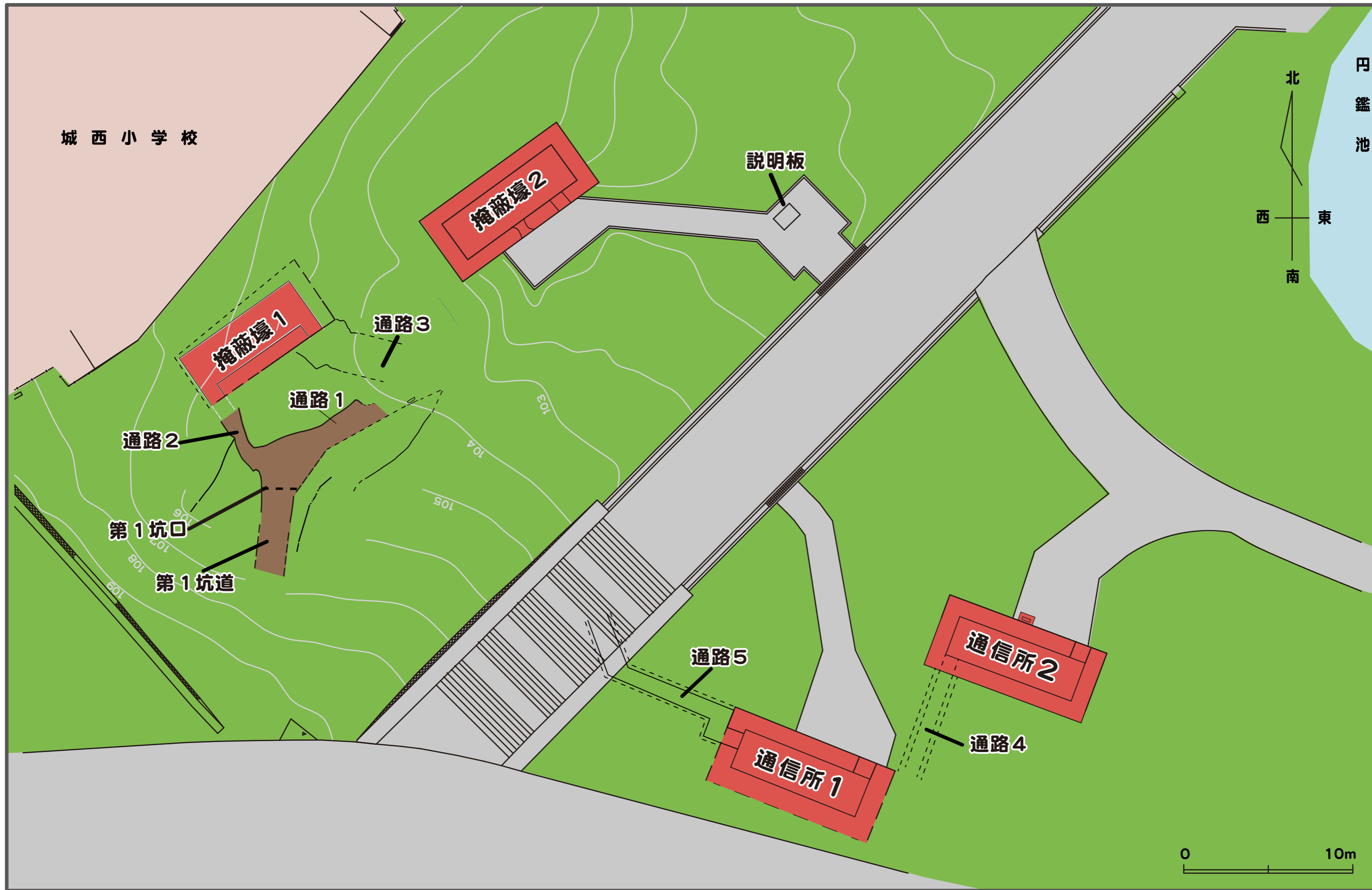
第32軍司令部壕の位置



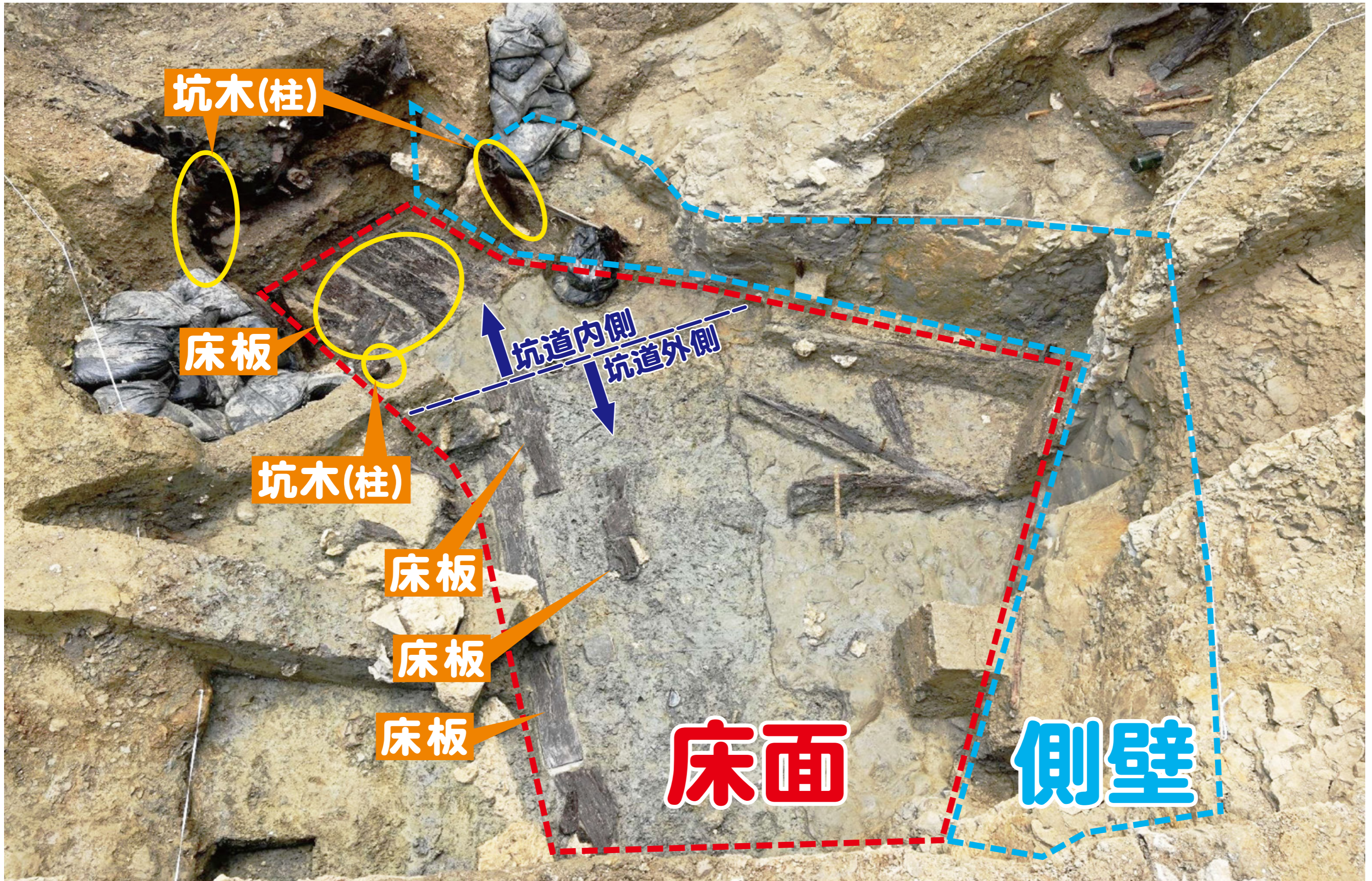
戦後の園比屋武御嶽石門／出典：那覇市歴史博物館



戦前の首里の忠魂碑／出典：「写真集首里城」(那覇出版社)



第1坑口、掩蔽壕、通信所跡周辺の平面図(2025年9月時点)



第1坑口の調査現場 (2025年2月時点)



米軍が撮影した第32軍司令部壕の第1坑道中央部分。右側に2段ベッド、左側は通路  
出典：米国国立公文書館



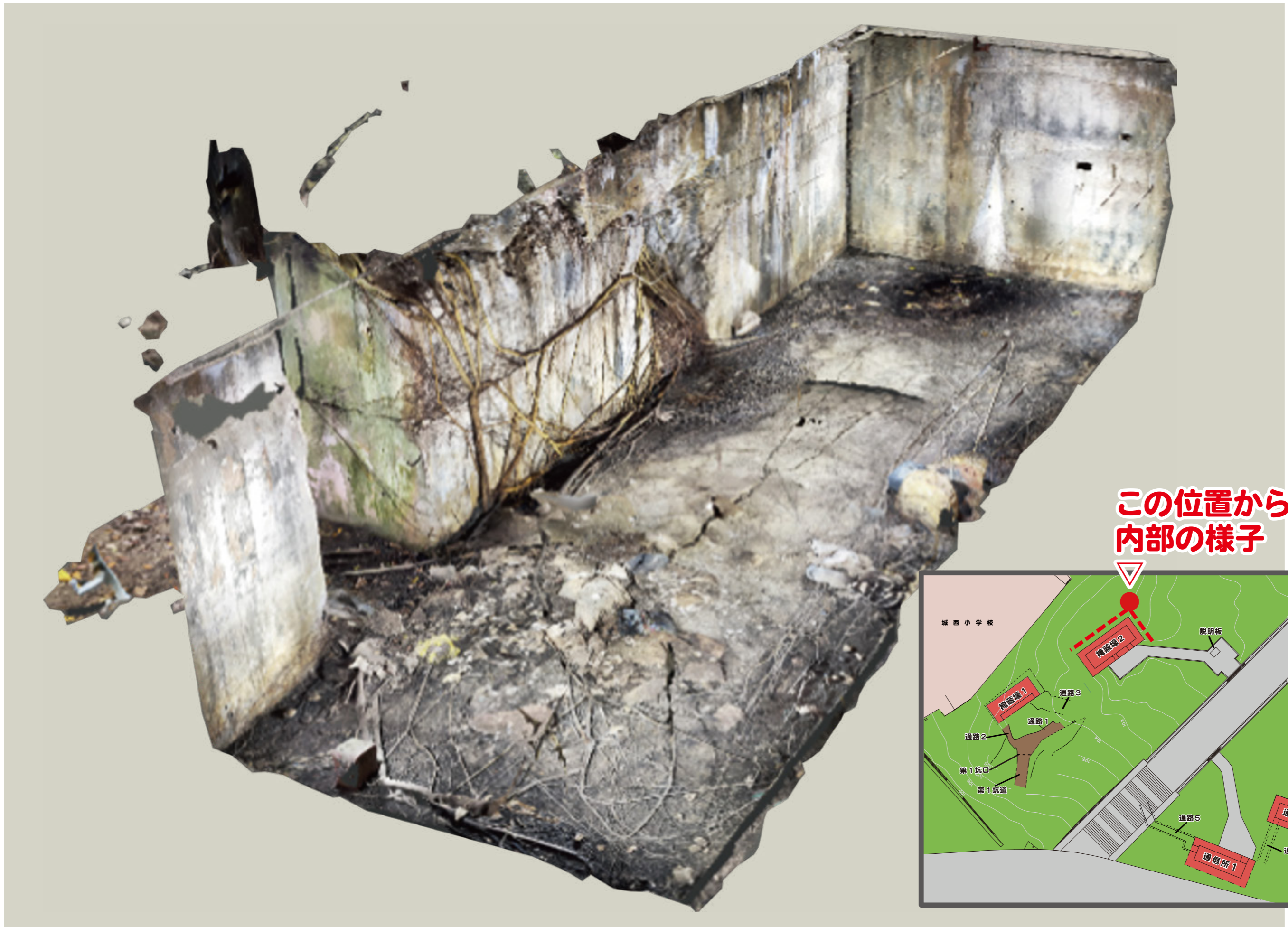
第2坑道内部(無支保工区間)の様子[2023年(令和5年)]



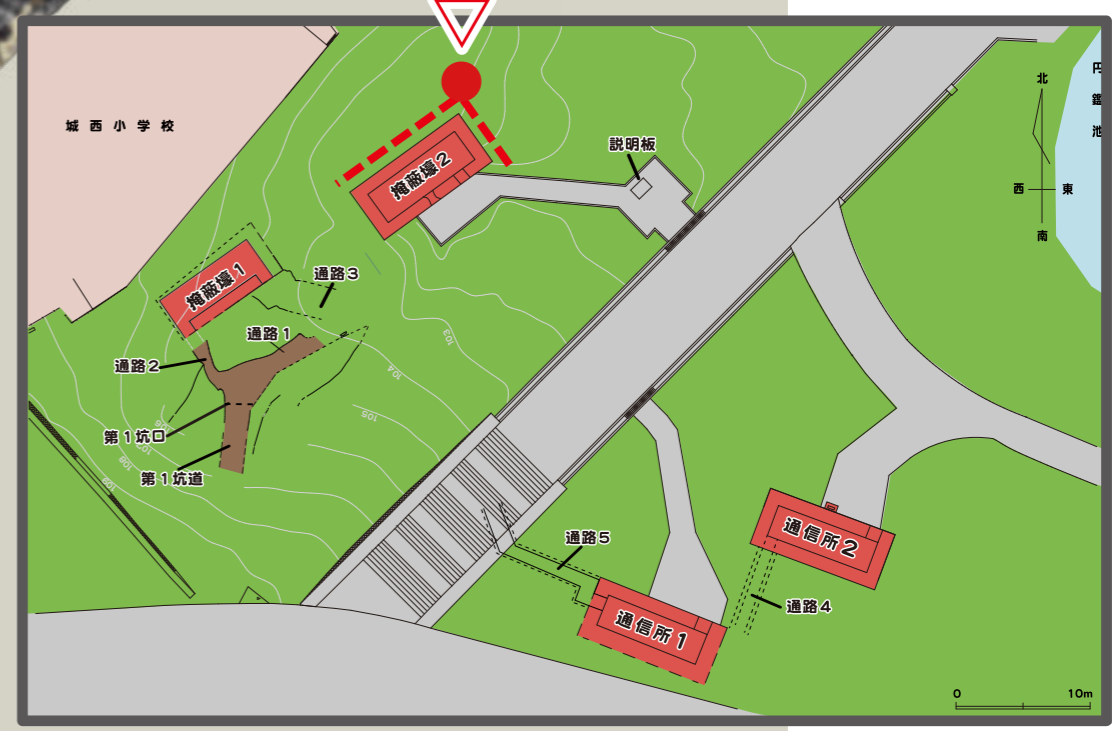
第3坑道内部の様子【2023年(令和5年)】



「エンジニアトンネル」[2023年(令和5年)]



**この位置から見た  
内部の様子**



掩蔽壕2の内部（北東側から見た内観）



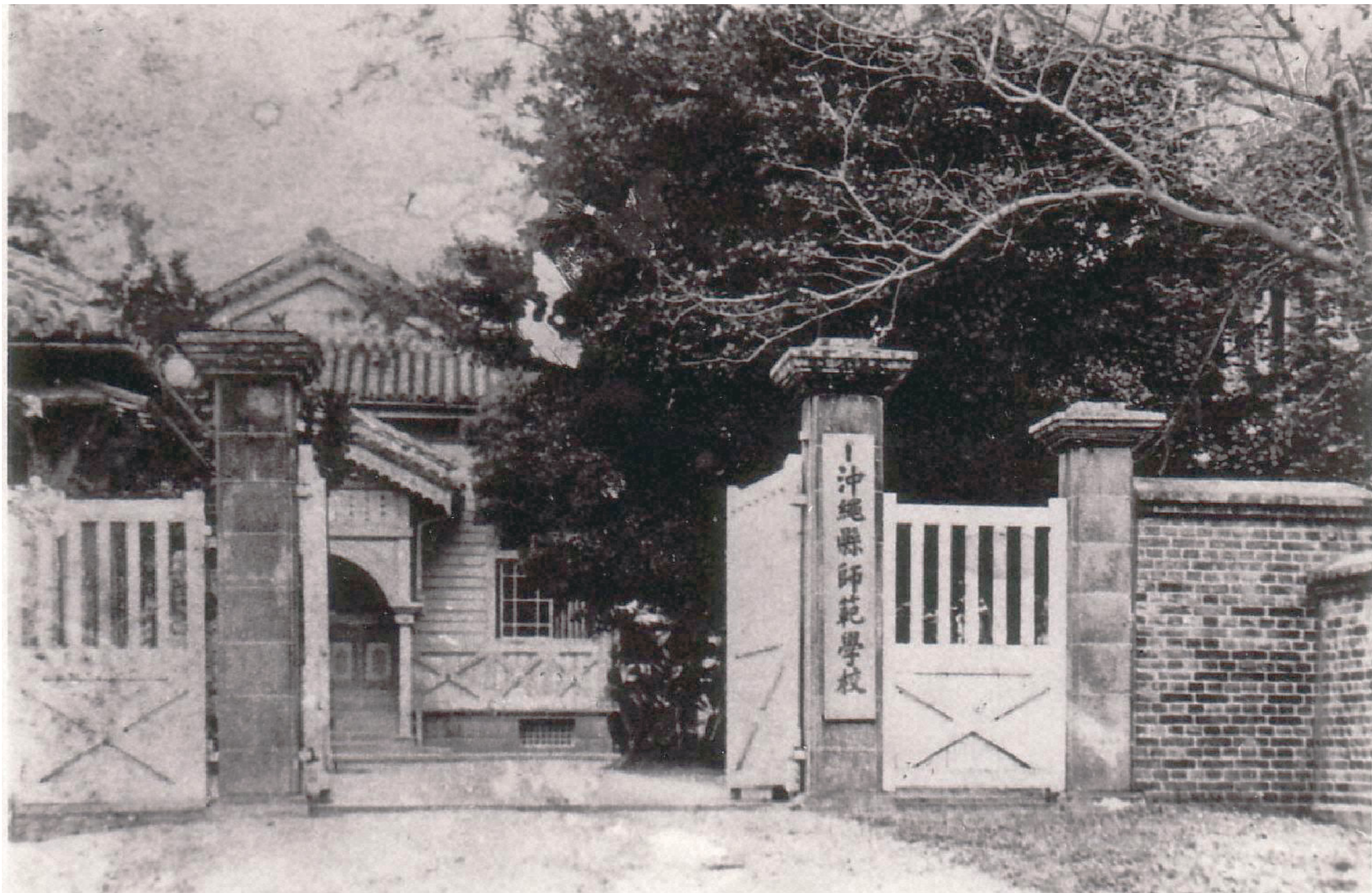
通信所1の内部（南東側から見た内観）



この位置から見た  
内部の様子

この位置から見た内部の様子▶

通信所2の内部（南西側から見た内観）



戦前の沖縄師範学校正門／出典：那覇市歴史博物館



焼失した仏殿に安置されていた仏像 / 出典：沖縄県立博物館・美術館



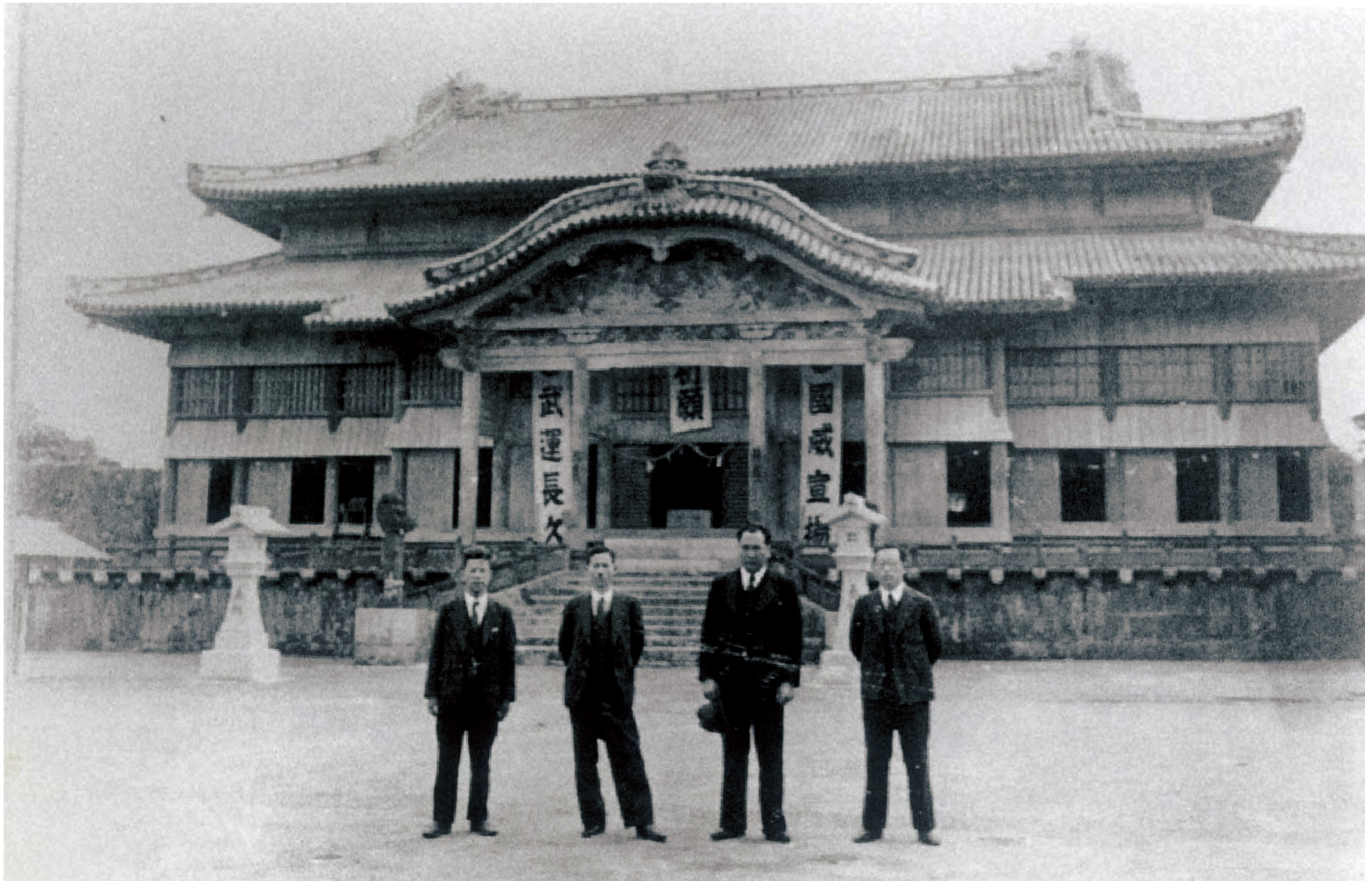
破壊された円覚寺(三門、放生池付近)1945年 / 出典：中城村・NPO法人琉米歴史研究会



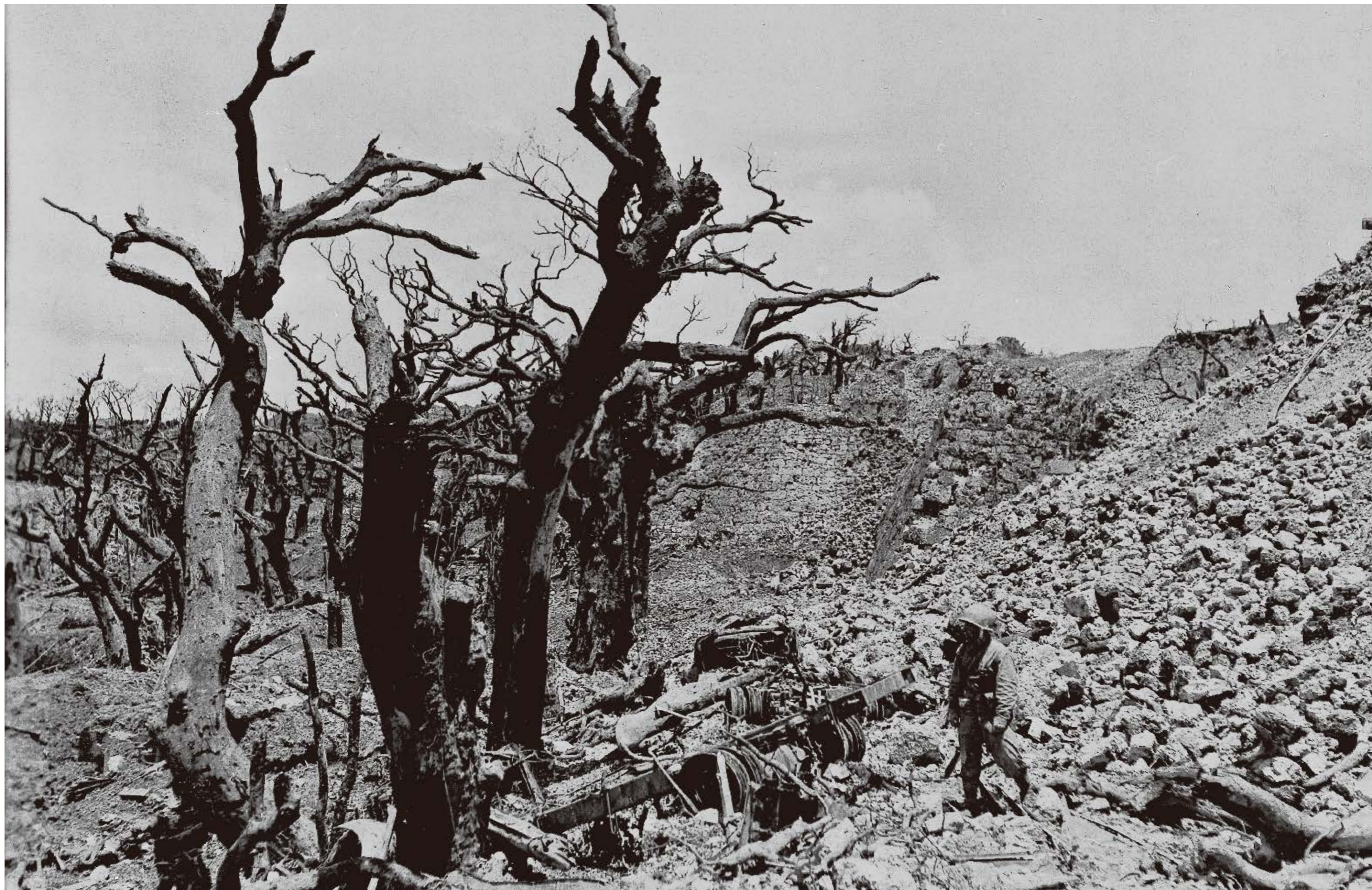
円覚寺の放生橋と三門に続く階段。右上の建物は琉球大学農学ビル(1961年2月4日) / 出典：那覇市歴史博物館







首里城正殿は、1925年から沖縄神社拝殿として使用されていた(撮影年不明)  
／出典：那覇市歴史博物館



廃墟と化した首里城の瓦礫の山[1945年(昭和20年)5月29日]／出典：沖縄県公文書館



首里の廃墟を進む海兵隊員。後方に破壊された教会が見える[1945年(昭和20年)5月29日]  
／出典：沖縄県公文書館



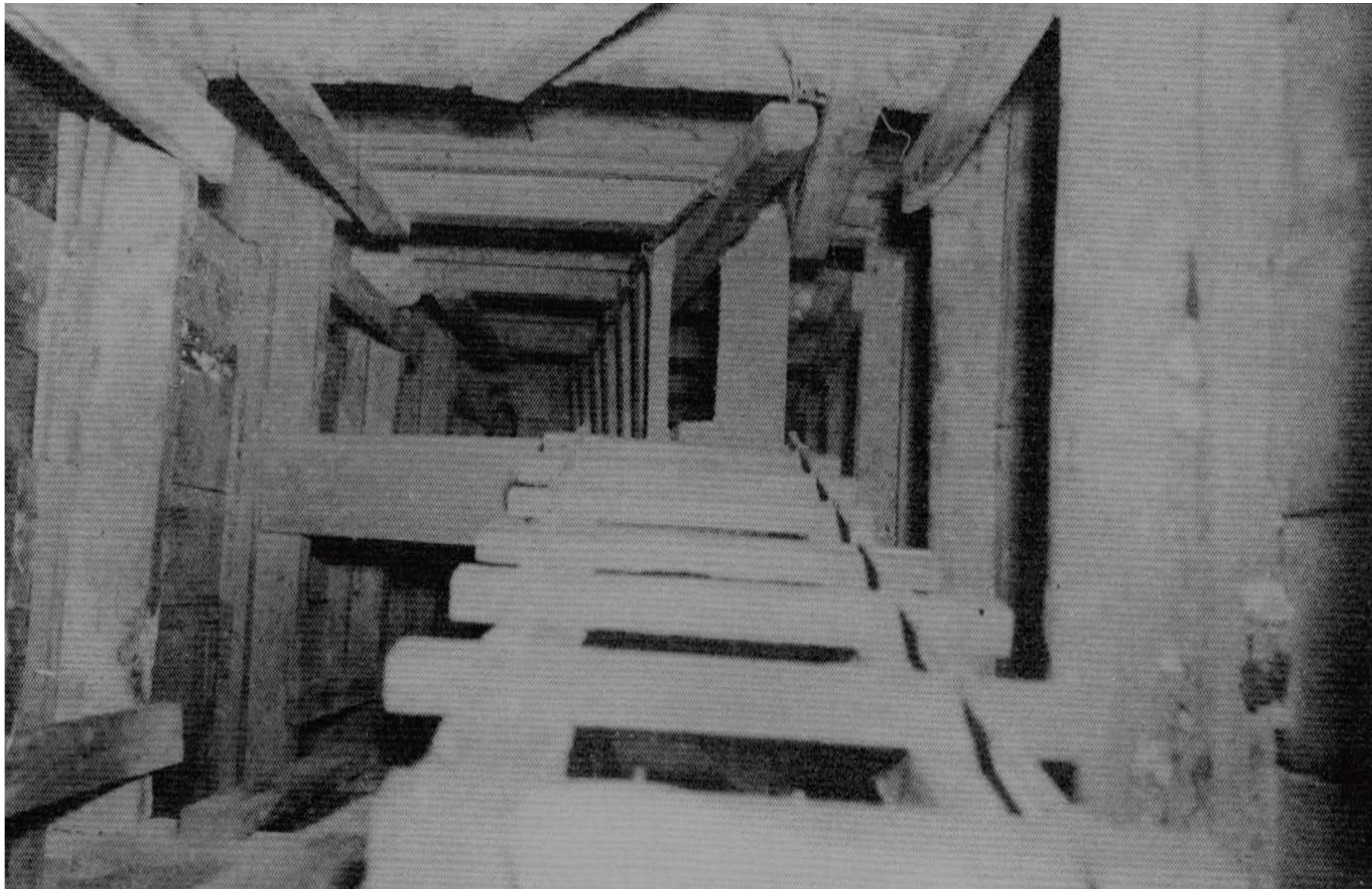
那覇港を攻撃した十・十空襲 [1944年(昭和19年)10月10日] / 出典: 沖縄県公文書館



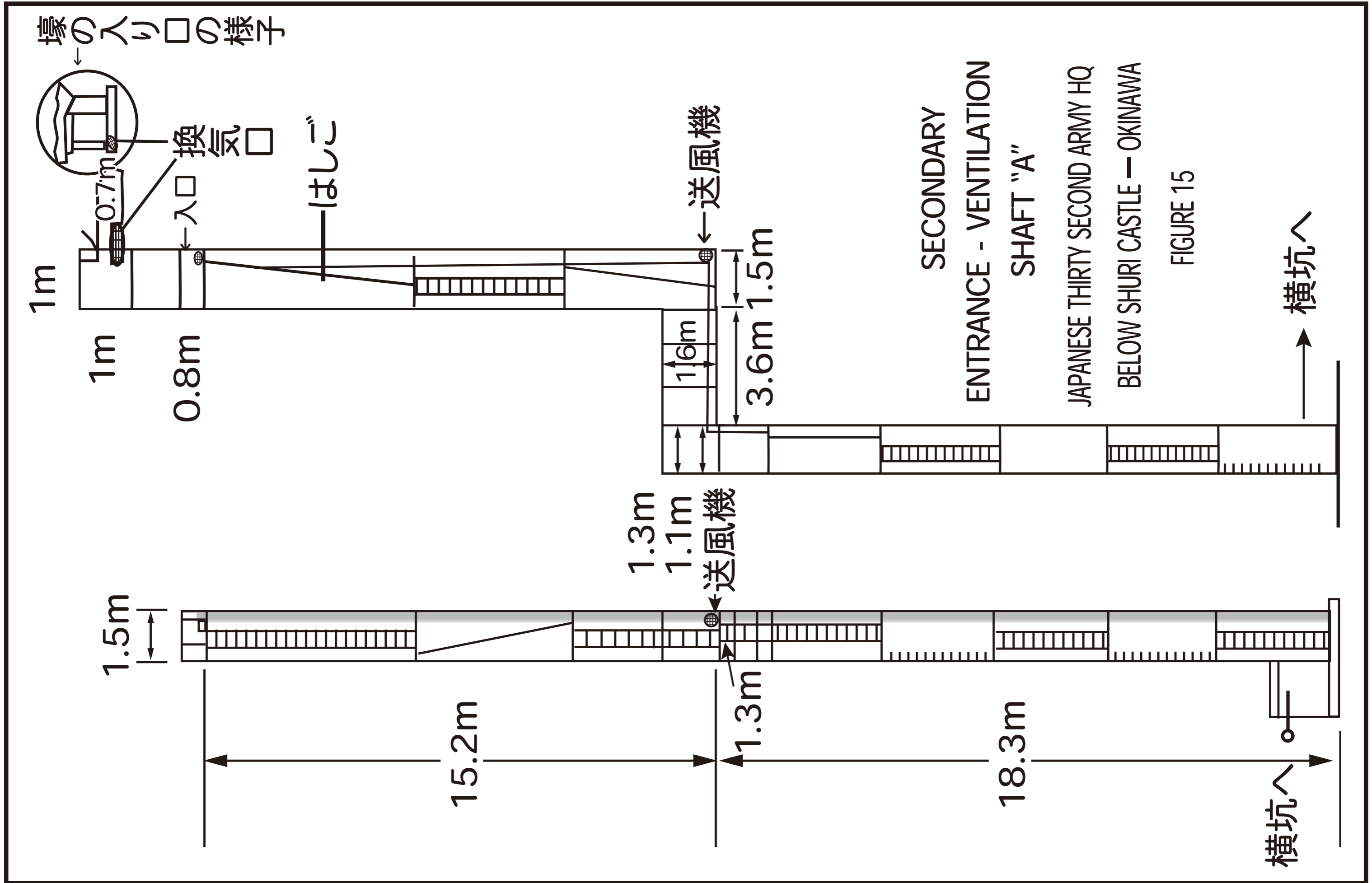
読谷村比謝川河口での米軍の物資陸揚げ[1945年(昭和20年)4月19日] / 出典: 沖縄県公文書館



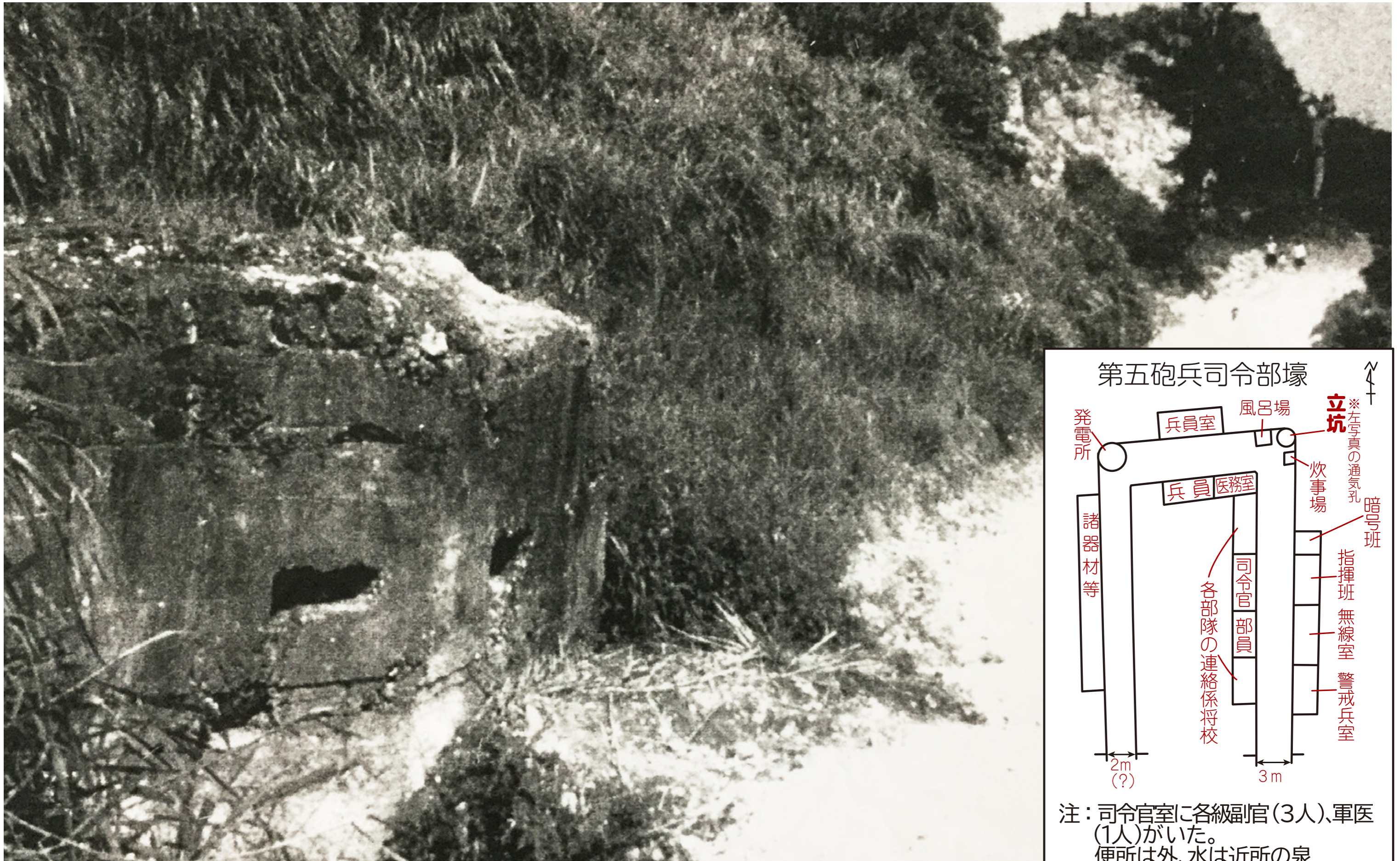
1945年(昭和20年)6月のシュガーローフ・ヒルの風景(現在的那覇市新都心地区)  
／出典:沖縄県公文書館



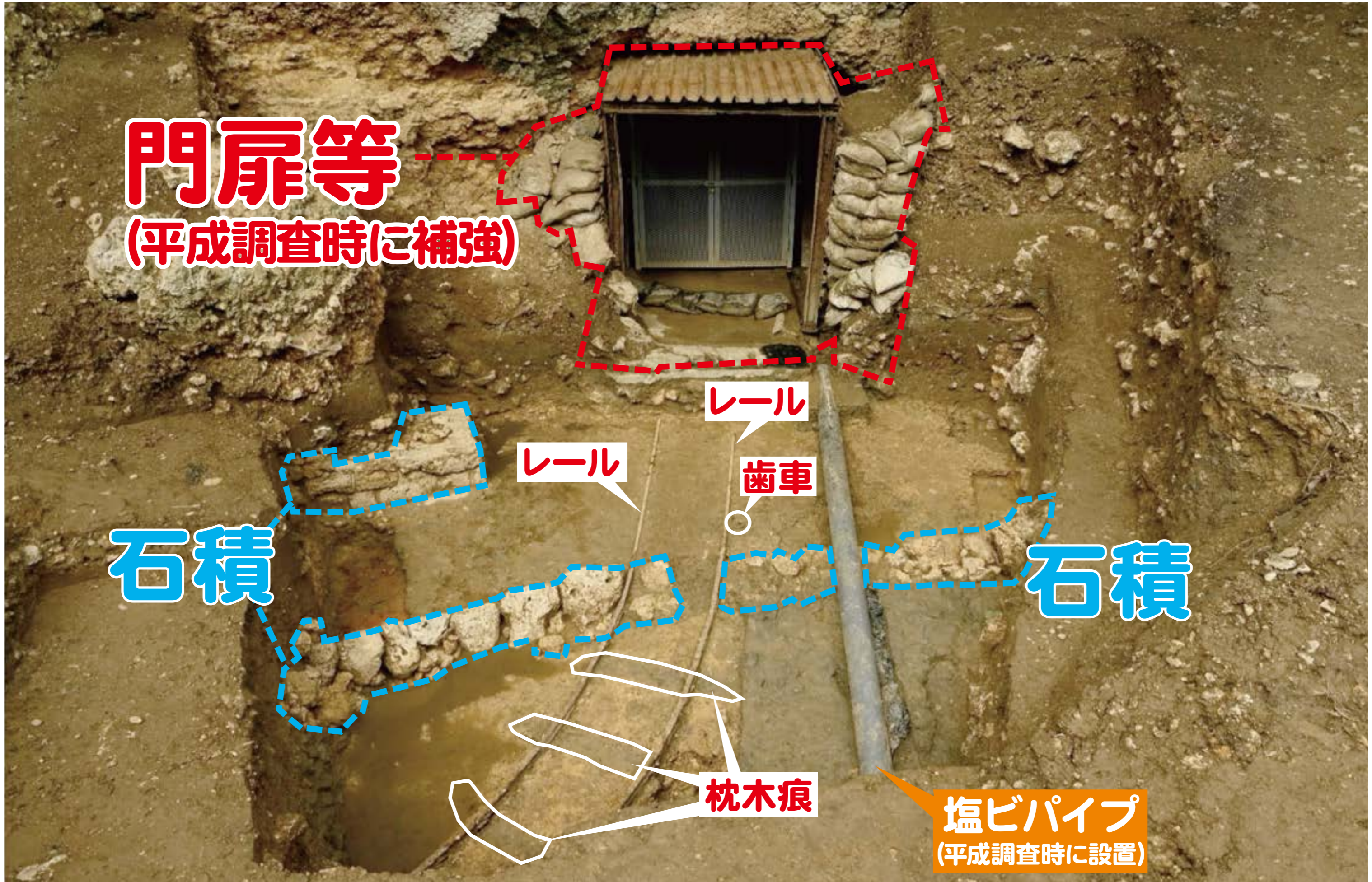
第32軍司令部壕の立坑Aを上から見た写真(インテリジェンス・モノグラフより)



第32軍司令部壕の立坑A側面図／インテリジェンス・モノグラフより作成



1960年の第5砲兵司令部壕の通気孔(立坑)の様子/出典:吉嶺全一さん撮影  
 第5砲兵司令部壕平面図イメージ/出典:潮書房「丸別冊13号最後の戦闘(沖縄・硫黄島戦記)」(1989年)内  
 清水徹也「第五砲兵司令部の一員として」(226p)を参考に作成



**門扉等**  
(平成調査時に補強)

**石積**

レール

レール

歯車

**石積**

枕木痕

**塩ビパイプ**  
(平成調査時に設置)

第5坑口の外觀。壕の坑口手前に幅60センチでカーブ状の赤くさびたレールが長さ約2.5メートルにわたって発見された。(2025年2月時点)



第5坑道内部の様子。絶えず水が染み出している。[2023年(令和5年)]